学会優秀報告賞

書誌学とは何か —— ロシア文学研究の視点から

源 貴 志

1. はじめに

「書誌学とは何か」というテーマは、このような小論で扱うにはあまりに大きい。⁽¹⁾しかし、日本のロシア文学研究という場に於いても、この問題は誰かがいつかは整理して置かなければならない問題であることは慥かであろう。

研究者ならば誰もが書物、或いは文献一般について相応の知識を持っているわけであるが、その知識は、各々の専門研究の必要につれて、言わば偶然に出会った断片的な情報の蓄積として獲得されているのが現状であり、書誌の利用に対する認識が研究者共通のものとなっていない。また、書誌についての知識が体系化されておらず、システマティックな訓練も用意されていない点が問題である。

その背景には、書物や文献一般についての知識を、独立した「学」として、科学として考えようという場合、つまり「書誌学」という言葉を持ち出した場合に、それが正確にどのような内容と方法論を持つのか非常に曖昧であるという事情がある。それどころか「書誌学」という言葉が果たして科学的な言葉であるのか、また、書誌学というものが独立した学問と言えるのかという問題についてさえ、どの程度の認識があるのか甚だ心許無い。

さらに、書誌学と言えば非常に時間と手間のかかるものであり、したがってそれは几帳面な性格の、篤志家がやるべき仕事で、それぞれ専門の研究に忙しい身にはとてもできないものだという意識があるように見受けられる。書誌学というのは退屈でつまらないものとまでは考えなくとも、これを敬して遠ざけるという傾向が一般的である。

しかし、一方に於いて、文学研究や語学研究には書誌学的な知識や手続きが不可欠であるという事は、誰もが認める。このような複雑な事情を鑑みるに、書誌学というものが客観的に見てどのような内容のもので、どのような位置を占めるものなのか、そしてそれがロシア語ロシア文学研究にどのような役割を

果たすものなのかを、できるだけ簡単明瞭に（博学多識をひけらかすような形ではなく、研究者の誰もが接近しやすいものとして）呈示する仕事が必要とされていると考えてよいであろう。

2. 書誌学の特殊性

一方で、「書誌学」という言葉が曖昧なものと感じられるのには、書誌学そのものの特殊な性質のなかにもその原因が考えられる。

まず第一には、書誌学はそれ自体、独自の領域を持つ独立の学問でありながら、その成果を他のあらゆる学問に提供する位置にあるという事がある。普通、書誌学と言えば文学研究などに非常に近い分野のように考えられがちだが、例えば社会科学なら社会科学の分野からの書誌学へのアプローチも大変に発達しており、諸科学と書誌学との距離は等距離と考えるべきである。⁽²⁾ したがって、人文科学の研究者は、いままでのように何となく近しい領域として書誌学を考えて曖昧な関係を続けるのではなく、まず書誌学を独立の学問として認識し、そのうえでロシア文学研究ならその独自の立場から、あらためて書誌学に対する自覚的なスタンスを決定する必要がある。

また第二に、書誌学には隣接する学問が非常に多い。と言っても、とりあえず境界線がはっきりしていなくては、どこまでが隣接するもので、どこからが書誌学固有の領域であるのか論ずることができない。そこでここでは結論を先取りする形で、まず最も狭い意味での書誌学の定義と、やや広い意味での書誌学の定義とを検討し、次いでそれを取巻く周辺領域の研究内容について考えてみたい。

3. 狭義の書誌学——目録学

端的に言うならば、狭い意味での書誌学というのは目録を作る学という事に尽きる。「書誌学（ビブリオグラフィー）」という言葉を考えてみても、ギリシャ語のビブリオンは「書物」、グラフォーは「書く」という事、これを併せて、「書物に就いて之れを書きとめる」意、現代風に言うならば、「書物を記述する」という意味になる。⁽³⁾

また、「書誌」の「書」の字は「書物」の事、「誌」の字は事物を「書きしるす、記述する」という意味で、中国では二千年を遡る昔から、正史すなわち国家の公式の歴史書には、その時点で知られている限りのすべての書物のタイトルを書き留めようとする、言わば「国書総目録」と呼ぶべき仕事の伝統がある

のは周知の事である。⁽⁴⁾

実は、「書誌学とは何か」という問題に対しては、現代的な定義がユネスコによって与えられており、それはやはり目録の学ということになっている。ただ、ユネスコの定義の場合、「書きしるす」対象を、印刷物（すなわち時代的にはグーテンベルク以後の書物）に限定している点が注意される。すると、ここでも書誌学の領域設定に揺れが生じて来る。ユネスコの定義や、それに影響を与えたフランスでの定義では、手で書かれた書物をリストアップする仕事は、隣接分野の学問に属することになる。

また、同じ目録学としての立場でも、知り得る限りの文献を網羅しようとする態度と、より優れた内容の書物をリストアップして、読者にそれを紹介・推薦しようとする態度とが考えられる。前者は、上記の中国の目録学の伝統がまさしくそれに当るわけであるが、ヨーロッパに於いても19世紀までは、この世に存在した限りの書物の総目録を作成しようとする試みが絶えることなく続けられた。一方、後者の立場からする目録学は図書館学の領域と重なり、そこには、のちに述べるように啓蒙思想や革命運動といったものが密接に関係して来る。⁽⁵⁾

4. 広義の書誌学（書物研究）

しかし、実際に書誌学の名で行われている研究の内容を見渡せば、目録学というものよりははるかに広い領域を包括しているように見受けられる。

すなわち、書物を物理的な対象物として、その外面的特徴（判型・紙質・活字・装訂など）を研究し、さらには出版のシステムやその歴史なども研究のテーマとするものである。この場合には研究領域が際限なくひろがって行く可能性があり、したがって様々な分野の学問との繋がりが考えられ、境界線上の、或いは隣接する領域をここに数多く想定できる。

まず、出版のシステムやその歴史の研究は、当時の社会史・経済史を考察する事になる。書物の流通のしくみの研究から、書物を利用する場所としての図書館の建築学的考察、当時の読書のありかたから、読者というものの社会的・心理学的考察、さらには読書論と来れば、これは文学研究に近い。そして文学研究と言え、当然思い浮ぶのが本文考証（テキストクリティク）である。異なる版の比較考証によって、より信頼できるテキストを提供するこの分野の仕事が無くては、テキストそのものを完結した世界として扱うような文学研究の方法さえも、その前提を根底から覆されかねない。本文考証は書誌学の隣接

分野のうちでもきわめて重要な位置を占めるものであろう。

また、ここでさらに大きな領域を占めるものとして考えられるのが、手で書かれたもの、いわゆる写本の研究である。印刷発明以前の時代については、文学や語学の研究に限らず、ローマ法そのほかの研究なども、写本の形態の研究からすべてが始まることになるだろう。そして、印刷発明以後も数百年のあいだは、印刷本と並んで写本が勢力を有する故に、この時期については、写本と印刷本の比較検討が必要となる。

また、印刷本が圧倒的優位に立ったのちであっても、手で書かれたものは歴史学に於いて最重要の「史料」となる。いわゆる古文書学というものが、これも定義が難しいものであるが、このあたりに位置することになるであろう。さらに、印刷されたテキストを前提とする近代文学の研究では、手で書かれたものは「原稿」として新たな研究の対象となる。原稿の研究は、推敲の過程の、延いては創作過程の研究として、作品・作家研究の重要な要素となり、全集校訂作業の主要な部分を占める。したがって、写本（手で書かれたもの）の研究というだけでも、その広がり果てしがたい。斯くして、これらすべてが書誌学の隣接分野あるいはその一部として理解されるわけである。⁶⁾

5. 地域による偏差

さらにもう一つ、書誌学のイメージを曖昧なものにしている原因がある。すなわち、一口に「書誌学」と言っても、国により時代によってその内容がかなり異なっているという事である。

例えば、上記のようにユネスコやフランスの定義では、書誌学と言えば、狭義の、目録の学ということになっている。抑も、フランスに於いて書誌学が目録学として発展したのは、18世紀末のフランス革命の際に、修道院や貴族の蔵書を国家が没収し、それら歴大な量の書物のリストを作る必要に迫られた事から急速に発展したのだと言われている〔文献3参照〕。

このような目録学はイギリスやドイツに於いても相応の発展を見ているものの、何と言っても最大の成果が見られたのは、アメリカに於いてである。アメリカ議会図書館の目録は、単なる一図書館の所蔵目録の域を越えて、世界最大級の書誌目録として機能している。また、アメリカの大学図書館では、研究者がテーマを示せば、そのテーマの研究に必要な文献と、その文献がどこに所蔵されているかを司書がリストアップするしくみが普及している。一般にアメリカでは、よりすぐった内容の読書リストを提供するという、目録作りの方法論

が非常に発達しているわけである。

しかし、地域・時代によっては、広義の書籍研究が優勢を示している場合がある。例えば、19世紀イギリスのシェイクスピア学は、この書誌学の成果をもとにめざましい進展を遂げたと言われている。すなわち、往時の出版のシステムの研究によって、シェイクスピアのテキストの不明だった点、疑問を存した点がことごとく実証的に明らかにされたという事がある。

簡単にその事情を見るならば、シェイクスピアの当時の印刷所では、印刷に掛かってからも、刷りあがったものを見て校正をするという習慣があったと言う。それで、校正する前の、誤ったままに刷った紙はどうするかと言うと、これも廃棄せずに製本してしまう。したがって、世間に流布している版本には、校正を経た回数 of いろいろのものがある事がわかって来る。

周知のように、印刷所では、紙1枚に表8ページ、裏8ページを印刷してこれを3回折り畳んで16ページ（或いはこの倍）の冊子体を作るというようにする。この時、どういう順番で紙を折るか、それも当時の習慣によって決まっておき、記録を調べてそれを明らかにすると、何ページと何ページがもとの紙の表で、のこりが裏だという事がはっきりする。それで現存している版本をいろいろ見比べてみると、或る版本の何ページと何ページとは校正済、残りのページは校正を経ていないとか、それらの事を総合して行くと、どれが誤植でどれがそうでないという事がわかり、それまで意味が繋がらなくて強引な解釈をしていたようなところが、単なる誤植である事がわかる、或いはそうでない事が証明される、という事になったわけである。

ところがここで重要なのは、イギリスではシェイクスピア学が文学研究に占める位置がきわめて大きいという事である。つまり、イギリスではまずシェイクスピア研究で行われた事が、他の作家や詩人の研究に波及する（これはドイツに於けるゲーテ学、ロシアに於けるプーシキン学などと対比できるであろう）。そのために、イギリスでは書誌学と言うとこのような書物の実証的研究を指すことになっている。⁽⁷⁾

このような実証的研究には非常に専門的な知識と経験とが不可欠である。日本で書誌学と言うと、古典籍に関するこの種の専門的知識の蓄積という意味合いが強く、時としてそれは限られた人間にのみ許される、特別の学問といった感じさえ与える。⁽⁸⁾

6. ロシアの目録学と啓蒙思想

ここでロシアに於いて書誌学がどのような発展を遂げて来たかという点について考えたい。勿論、狭義の書誌学すなわち目録学と、広義の書物研究とがそれぞれに発展して来たのであって、どちらが欠けているというような事はない。ここでは便宜上分けて考えたが、これはただ、国により時代によってそのベクトルの大きさ、或いは隣接の分野（延いてはその国の文化）に与えて来た影響の大きさに偶然相違があるに過ぎない。

特に、広い意味の実証的書物研究は、中世文学の写本テキストの研究には欠かせないものである。むしろ、その研究手続の大部分を占めるものと言えるであろう。中世の写本を自分の目で読み、その鑑定をするという事は、非常に特殊な訓練を必要とするものと思われる。しかし、ここでは該博な知識を前提とするこの種の問題に立ち入ることはできない。

したがってここでは、研究者なら誰でも一応の知識を持っているべきだと考えられる、狭義の書誌学（すなわち目録学）の基礎知識について、そしてその普及という事について注意を喚起したいと思う。⁽⁹⁾

ロシアの目録学的書誌学は、ヨーロッパ各国に比べればやや遅く出発したが、18世紀には既に注意すべき成果が見られる。それはやはりピョートルの西欧化政策と密接な関係を持つ。抑もロシア最初の図書館というのが、ピョートル一世が新しく建設した首都サンクトペテルブルグに、自らが蒐めた書物や、バルト海沿岸の貴族などから没収した書物を収めたもので、これがすぐ後を追って設立された科学アカデミーの図書館となって今日に至っているものである。この、ピョートル個人のイニシャチヴが非常に強く働いてできた、書物を通じての西欧文明の移入の窓口で、実際に書物の蒐集と整理に当たったのは、ヨーロッパから招聘されたいわゆる御雇外国人たちであった。19世紀半ばに至っても、ロシアで最も充実した図書目録は御雇外国人最後の世代のひとりカルル・ベールによって作られたものであり、この図書館では外国図書の収蔵量がロシア語図書の倍以上であった〔文献10参照〕。

次いでエカテリーナ二世は自らがヴォルテールの翻訳をしたり、その著書を蒐めたりというような、典型的な啓蒙君主であったが、この時代に、ロシアの書誌学史上に重要な動きが現われる。そのひとつはニコライ・ノヴィコフの仕事である。ノヴィコフは自ら印刷所の経営に当り、さまざまな雑誌の発行や、ディドロ、ジャン・ジャック・ルソーの著作集の出版など、その活動は多様だが、なかでもロシアの最初の作家事典の試みや、雑誌形式の解説図書目録

の発行はロシアの書誌学史上ばかりではなく、文学史上も重要な出来事である。この時代がロシアの書誌学史上重要な時代となっているのには、フランスの啓蒙思想が重要な役割を果たしているものと考えなくてはならないだろう。

しかし、ロシアの書誌学が世界的な成果を挙げ、ヨーロッパのそれと肩をならべ、或いはそれを凌駕するようになるのは、19世紀の末から革命にかけての事と見做される。これはナロードニキの啓蒙思想と密接な繋がりを持っており、事実、この時期に大きな仕事をのこした人はナロードニキとしての活動の経験を有している〔文献7参照〕。

なかでも、「書物のなかで (Среди книг)」〔文献19〕を編集したニコライ・ルバーキンや、「十九世紀以前ロシア文学総目録」〔文献20〕のアウグスタ・メジエル、モスクワやペテルブルグで設立されたロシア書誌学会の中心となって活動したセミヨン・ヴェンゲーロフの仕事などを逸することができない。あらゆる分野の膨大な数の書籍を整然と分類して解説しようとしたこれらの書誌学上の仕事こそ、ナロードニキの活動が政治的には挫折したにしても、その情熱は決して無駄に終わりはしなかった事を物語るものであろう。

7. 革命後の書誌学と全国書誌

20世紀に入って、革命後の書誌学は、個人の仕事から集団の仕事へと大きな転換を見せるのだが⁽¹⁰⁾、20世紀ロシアの書誌学の成果として最も注目すべきものは、書誌学のセンターとしての集書院 (Книжная палата) の活動と、そこから現在も出版が続けられている「書籍年誌 (Книжная летопись)」ほかの全国書誌であると思われる。⁽¹¹⁾

すなわち、1907年以降にロシアで出版された書物は、「書籍年誌」によってほとんどすべてが微細に記述されているという事実を認識しなくては行けない。書名・副題・著者・編集者・版次・出版社・出版年・ページ数・判型は勿論、一時期はその本の重量まで記されていたのである〔文献12参照〕。そしてこの「書籍年誌」はリプリントが刊行されるなどして、日本の図書館でも簡単に見ることができる以上、20世紀のロシアの書物に関しては、これに当らないままに、「現物を見た事がないから詳しいデータはわからない」などと言うのは、研究者として至当な態度とは言えないことになる。⁽¹²⁾

雑誌記事や新聞記事に関しても「年誌 (Летопись)」が刊行されており、これを参照するのが基本にならなくては行けない。また、19世紀以前のものにしても、文学作品ならば上記のメジエルの目録でかなり詳しい事がわかる〔文献

20]。その他のすぐれた書誌によって我々は、居ながらにして（つまり、時間のない人でも簡単に）有益な知識を得られるわけであり、これらの書誌についての理解は基礎知識として欠かせないのである。

8. むすび

これらの書誌に関する知識は、残念ながらまだ研究者間の普遍的な知識とはなっていない。それは、この書誌学に関する知識が、最初に述べたような理由によって、システムティックに、誰にでもわかるように整理され教育されるようになっていないためである点をあらためて強調したい。

現在既に、目録の作成と検索とに関しては、コンピュータの出現によって革命の変革の時期を迎えている。しかし、コンピュータという技術の目新しさに心を奪われて、これまでの文化の媒体であった書物に対する用意を忘れてしまえば、コンピュータ導入の大きな波に洗われたあとには、これまでの人類の精神的遺産は雲散霧消してしまうと心配するのは、決して杞憂とは思われない。^[3] 現在コンピュータに関する研究や事業には国家的な規模で予算が出され、人員が割かれているものの、その一方で書籍・文書類はせまい薄暗い書庫のなかで、急速に顧みる人もなくなり、朽ちはてつつあるとあってよい極端な状況に置かれている。^[4] ここでいま、書物を取扱う術としての書誌学の伝統を継承することに失敗すれば、20年、30年後に我々が手にするものは一体何であろうか。

さらに最後にこの場を借りて付け加えたい。この日本ロシア文学会に於いても、学会として、ロシア語ロシア文学研究についてわが国の先達たちがのこしてきた研究や紹介の仕事を網羅する書誌を作成することが急務ではないだろうか。若い研究者がそれぞれのテーマに関して、まず先人の仕事にどんなものがあるか、簡単にしかも確実に知る事ができるような、システムティックな書誌目録の作成を、できるだけ早く学会全体の規模で考えないと、これもやがて遅きに失するのではないか。この機会に注意を喚起したいと思う。

註(1) 本稿は、1991年10月26日の日本ロシア文学会研究発表会に於いて行なった研究発表を、書き言葉にあらためるなどのほかは、できるだけもとの形のままだに残すこととし、補足すべき点は以下の註および参考文献一覧によって参照できるようにした。

(2) 例えば、大塚金之助やメンガー文庫といった、経済学者で書誌学に携わった人物や、その努力で一橋大学の図書館に納められる事になったヨーロッパの経済学文献のコレクションの数々などは、社会科学と書誌学の関係の深さを語るよい例である[文献1参照]。

- (3) 現代の書誌学・図書館学の用語としてこの概念に対応するものに、「[書誌] 記述 ([Библиографическое] описание книги)」がある [文献13参照]。
- (4) 「漢書」の《藝文志》, 「隋書」の《経籍志》, 「唐書」の《藝文志》などの名を挙げる事ができるが, 詳しくは [文献2] を参照。いわゆる四庫全書の思想を考える事ができるだろう。
- (5) ロシアでは, «Рекомендательная библиография» と呼ぶ方法論が発達している。
- (6) ロシアでは, 広義の書誌学を «Библиография» と呼ばずに, «Книговедение» 或いは «Изучение книги» と呼んでいる [文献14ならびに15の表題を参照]。
- (7) イギリスの書誌学に関するこの部分の説明には, 寿岳文章による論文『書誌学とはなにか』に詳しく書かれているものを参照した [文献4所収]。この論文はイギリスに於ける書誌学の定義, つまり広義の書籍研究を書誌学とする定義を反映したものである。
- (8) 現在, 日本の書誌学に関する手近な教科書としては [文献5・6] などがあるが, 少なくともこれらが広義の書誌学を内容としていることは明らかである。
- (9) この目録学としての書誌学についての知識は, 特に近代・現代文学の研究者共通の理解として, 必要欠くべからざるものである。なお, 以前からロシアで «Библиография» という名称で表現されているのは, 歴史的に見て目録の学と解してよい (註3・6参照)。
- (10) この間の事情については, 以前にナウカの雑誌「窓」に『「ソビエト図書年鑑」について』と題して, ここに述べているような観点から検討した事がある [文献11]。
- (11) 集書院は, いわゆる納本制度によって, ソビエト連邦全国の出版所というよりは印刷所で印刷されたものすべてを集め, これを記録して, 全国書誌を作成・発行する。全国書誌刊行物には次のような種類がある [文献8参照]。
- 1 書籍年誌 «Книжная летопись» (1907年～) [文献9参照]
 - 2 逐次刊行物年誌 «Летопись периодических и продолжающихся изданий» (1933年～)
 - 3 新聞記事年誌 «Летопись газетных статей» (1936年～)
 - 4 雑誌記事年誌 «Летопись журнальных статей» (1926年～)
 - 5 書評年誌 «Летопись рецензий» (1935年～)
 - 6 美術出版物年誌 «Летопись изобразительных искусств» (1934年～)
 - 7 楽譜年誌 «Нотная летопись» (1931年～)
 - 8 地図年誌 «Картографическая летопись» (1931年～)
 - 9 図書年鑑 «Ежегодник книги СССР» [文献11参照]
 - 10 書誌年鑑 «Библиография советской библиографии» (1948年～)
- このほか, 書誌学研究の基本的な論文集・雑誌として次のものが刊行・発行されている。
- 1 «Книга: Исследования и материалы» (1959年～) (年2冊)
 - 2 «Советская библиография» (1929年～) (年6回)

- (12) 勿論、書誌学では現物を見る (De visu) ことが重要視されるが、現物から獲たデータを目録類のデータと突き合わせることを怠ると、たまたま目にした現物が特殊な刊本 (例えば、ロシアには通例見られない増刷本) であった場合に (出版年などについて) 判断を謬ることになりかねない。
- (13) 書誌学に於けるコンピュータ導入の問題はそれだけで大きな問題であると同時に、焦眉の問題でもあるが、ここではむしろ旧来の情報伝達手段である書物に対する再認識の問題を問いたい。
- (14) これは決して大袈裟な表現ではない。1988年2月のソ連科学アカデミー図書館の火災ひとつを挙げるだけで、思い半ばに過ぎるものがある。この火災は決して対岸の火事ではない。この事はかつて『「文化のチェルノブイリ」その後—ロシア・ソビエト書誌学覚書 (9~13)』として情報紙「ノーマル」で詳しく扱ったことがある (第23・28・29・31・32号) [文献10参照]。

参考文献一覧

- [1] 脇村義太郎 回想の九十年 (岩波書店 1991年)
- [2] 清水 茂 中国目録学 (筑摩書房 1991年)
- [3] L. N. マルクレス 藤野幸雄訳 書誌 (文庫クセジュ 645 白水社 1981年)
- [4] 寿岳文章 書物とともに (富山房百科文庫 29 1980年)
- [5] 長澤規矩也 古書のはなし—書誌学入門— (富山房 1976年 1981年再訂)
- [6] 山岸徳平 書誌学序説 (岩波全書 301 1977年)
- [7] 佐々木照央 ロシアにおける文献学の歴史—ナロードニキの文献学者H. A. ルバーキンの場合 (「経済資料研究」第11号 1976年7月)
- [8] 藤野幸雄 ソ連の全国書誌 (「書誌索引展望」第10巻第2号 1986年5月)
- [9] 小林清美 ロシア・ソヴェト全国書誌『図書週報』をめぐって (1907—1920) 上・下 (「経済資料研究」第15号 1981年1月, 第18号 1985年4月)
- [10] 源 貴志 ロシア書誌学史のなかのカルル・ベールとアカデミー図書館 (「早稲田大学大学院文学研究科紀要」別冊第17集 文学・芸術学編 1991年1月)
- [11] 源 貴志 「ソビエト図書年鑑」について—ロシア・ソビエト書誌情報学の基礎知識 (前)・(後) (「窓」ナウカ 第71号 1989年12月, 第72号 1990年3月)
- [12] 源 貴志 ロシアの本の解剖学 1~8 (「窓」ナウカ 第74号~第81号 1990年9月~1992年6月)
- [13] Симон К. Р. Библиография // Симон К. Р. Избранное. — М.: Книга, 1984. — (Труды деятелей книги). — С. 174—187.
- [14] Книговедение: Энцикл. словарь. — М.: Сов. энциклопедия, 1981. — 661 с.
- [15] Осипов В. О., Демьянова А. М., Осипова А. С. Основы библиографии и изучения книги: Учебник для техникумов. — 2-е изд., перер. и доп. — М.: Книга, 1989. — 220 с.
- [16] Моргенштерн Н. Г., Уткин Б. Т. Занимательная библиография. — 2-е изд., испр. и доп. — М.: Кн. палата, 1987. — 255 с.

- [17] Семеновкер Б. А. **Ретроспективная государственная библиография СССР**: Справочник / Госкомпечати. — М.: Кн. палата, 1990. — 303 с.
- [18] Здобнов Н. В. **История русской библиографии до начала XX века.** — 2-е изд. / БАН. — М.: Изд-во АН СССР, 1951. — 511 с.
- [19] Рубакин Н. А. **Среди книг**: Опыт обзора рус. кн. богатств в связи с историей науч.-философ. и лит.-общ. идей: Справочное пособие для самообразования и для систематизация и комплектования общеобразоват. библиотек, а также кн. магазинов. — 2-е изд., доп. и перер. Т. 1—3 (Ч. 1). — М.: Наука, 1911—1915.
- [20] Мезьер А. В. **Русская словесность с XI по XIX столетия включительно**: Библиогр. указ. произведений рус. словесности в связи с историей лит-ры и критикой: Книги и журнальные статьи. Ч. 1—2. — СПб., 1899—1902.

ЧТО ТАКОЕ БИБЛИОГРАФИЯ ?

— С точки зрения изучения русской литературы. —

МИНАМОТО Такаси

Исследователи какой бы то ни было отрасли знания должны знать, какие книги и какие статьи написаны до сих пор по их специальности.

Конечно, литературоведы (особенно японские русисты) в основном информированы о многих книгах по своей теме. Но эта информация обычно накапливается за долгое время часто случайно, а не систематически. Исследователи, увы, не всегда пользуются библиографическими пособиями.

К сожалению, распространено убеждение, что библиография — занятие скучное. К тому же слово «библиография» считается не научным термином. То есть многие исследователи не рассматривают библиографию как самостоятельную науку.

Как причины такого недоразумения можно отметить следующие: во-первых, хотя библиография сама по себе независимая наука, она предоставляет свои достижения другим наукам всех отраслей знания; во-вторых, весьма много наук, смежных с библиографией. Бывает очень трудно отделить библиографическую науку от других. Обычно филологи, в том числе языковеды и литературоведы, склонны считать свои исследования близкими к труду библиографов.

Поэтому необходимо точно и ясно определить роль библиографической

науки. Все ученые нуждаются в пособиях, представляющих им библиографическую систему. Такие пособия не предполагают наличия особой эрудиции, они лишь должны давать исследователям основы систематических знаний, необходимых для получения научной информации.

Здесь, в коротком докладе, можно указать только краткое определение библиографической науки как в узком, так и в широком смысле.

1. Библиография в узком смысле: каталогизация книг или описание книги. Это область научно-методической деятельности по подготовке информации о книгах и других видах печатной продукции.

2. Библиография в широком смысле: научная дисциплина, изучающая историю книги, историю издательской деятельности, внешности книги (размер, качество бумаги, шрифт, оформление и т. п.) и многие другие виды деятельности, связанной с книгой. Эта отрасль знания сейчас называется на русском языке книговедением.

Еще надо отметить, что в истории книги всего мира библиография как наука развивалась не единообразно. В некоторых странах иногда библиография в широком смысле значительно преобладала (например: в Англии в шекспироведении XIX века огромную роль сыграло книговедение). И наоборот: во Франции после революции 1789 года стремительно развивалась библиографическая наука как методика регистрации конфискованных книг.

Можно отметить, что в России преобладает до сих пор библиографическая наука в узком смысле. Думается, что традиция русской библиографии восходит к XVIII веку — эпохе введения западной цивилизации Петром I. Особенно важную роль сыграли просветительские мысли, привнесенные из Франции при Екатерине II. Но самое важное значение имели деятельность народников и их потомков в конце XIX — начала XX века.

Теперь и мы, все японские русисты, можем пользоваться добротными сделанными государственными библиографическими указателями (ГБУ) («Книжная летопись», «Ежегодник книги СССР», «Летопись журнальных статей» и т. п.) и многими другими отраслевыми библиографическими пособиями. Так, мы можем узнать о почти всей продукции русских типографий, легальной и нелегальной включительно.

Нам, особенно японским русистам, надо изучить основную систему русской библиографии и ее достижения — прекраснейшие памятники русской культуры. Надо составить пособия, которые сделают доступной эту систему для всех русистов Японии.